

固原漆棺の孝子伝図について(上)

黒 田 彰

—

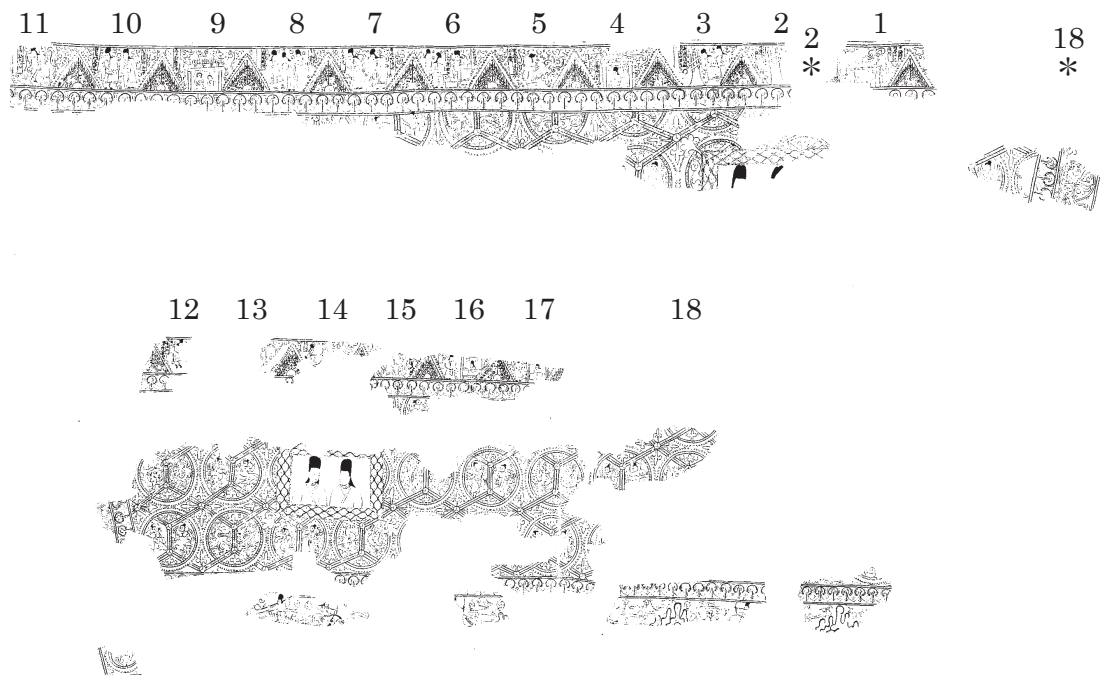
小稿は、固原漆棺の孝子伝図を紹介、その内容を考察しようとするものである。固原漆棺の孝子伝図というのは、寧夏固原北魏墓漆棺画に描かれた孝子伝図を差し、かねてより世界的に名高い、孝子伝図研究の一級資料でありながら、その全貌は、未だ紹介されることがなく、具体的な図像の知られるに至っていないことは、孝子伝図研究史にとって、一大痛恨事とすべき事柄であった。私が固原漆棺の孝子伝図の存在に気付いたのは、一九九七年頃、東野治之氏の教示によるものである。以来、何とか原図の実見や撮影を願っていた所、中国社会科学院考古研究所の趙超教授の紹介により、寧夏文物考古研究所長、羅豊教授の知遇を得ることが出来た。その羅豊氏の尽力によつて、私は二〇〇〇年九月、二〇一一年九月、二〇一三年三月、二〇一四年三月の四次に互つて、固原漆棺を調査することが出

来た。初回時には羅豊氏の都合が付かず、氏にお会い出来たのは、確か二回目の二〇一一年九月六日のことと記憶している。その折、氏から固原漆棺に描かれた孝子伝図についての解説論文を書くよう、正式な依頼を受けたことは、私にとって望外の、また、何より光栄な話であった。その後、拙稿「寧夏固原北魏墓漆棺画の孝子伝図」（孫彬氏訳）を氏に提出したが（未刊）、小稿は、それでない。小稿はまず、日本と言うより世界に先駆けて、固原漆棺に描かれた全孝子伝図の正確な紹介、報告を目差すもので、且つ、三回目の調査（二〇一三年）以降、現在（二〇二二年）までの十年間における、著しい北魏時代の孝子伝図の研究の進展——特に呉氏蔵品の出現をめぐる（後述）——の中、固原漆棺のそれが、一層重要且つ、新たな学術価値を帯びつつある状況を踏まえ、その再評価を試みようとするものである。そのため、前稿との重複を最小限に抑え、可能な限り最新の情報を盛り込むことに努めた。調査が十五年間、四次にも及んだのは、孝子伝図の撮影が固原博物館の倉庫という、圧倒的な光量不足下のものだったためで、加えて、カメラの側のフィルムからデジタルへという、時代の変化も挟んで、三分が失敗に帰した。満足の行く結果が得られたのは、四回目にあたる二〇一四年三月のことであり今般、図版と挿図に用いたのが、その折の画像データに外ならない。人文学の基礎研究にあつて、原物調査という段階は、分野を問わず、不可欠な作業となっている。第三次の二〇一三年三月の折は、羅豊氏が漆棺の出土した雷祖廟村へ案内して下さった。その帰途かと思うが（一次の折であつたかも知れない）、地元線の線香屋の店先に古雑誌が積んであつて、『寧夏文物』の名が目にとまり、その四号に張莉氏「北魏墓漆棺画的保護与修復」が載っているのに驚いた。¹ 売物かと聞くと、そうだという話で、何十円（日本円）かで買うことが出来た。その貴重な内容については、後で触れよう。それも含め、調査の面白い点は、現物を見なければ分からないことが、多々あることだろう。例えば一回目の時、件の漆棺が、赤紫に塗られた現代の木棺の上に、北魏時代の漆皮を貼り付けるといふ形で、復元されているのに驚かされた。その漆皮にあちこち反りが出て、ストロボを

使うと白く光って、どうしても巧く撮影出来ないのである（三回目）。ともあれ、現物を目にするのと、思いも懸けなかったことがよく起きる。腰が抜けそうな程、私を驚愕させた一事を紹介しよう。固原漆棺に、舜の物語が描かれていることは、当初から承知していた。その舜の物語の中に、かつて柳田国男が継子の井戸掘りと命名した、継母が舜に井戸を浚わせ、生き埋めにしてしまおうとする一節がある。問題は、その一節中に、舜が横穴を掘る時間を稼ぐべく、予め金銭を用意して、泥中にそれを混ぜ、欲深い継母、弟に拾わせるとする、文献の存したことである（舜子変、太平記）。私をまず驚かせたのは、本漆棺の舜の画像の題記の中に、「金銭」の文字がはっきりと見えたことである。⁽²⁾しかし、その金銭そのものの画像があらうとは当時、予想だにしていなかった。ところが、実見した固原漆棺には、題記のみならず、その画像までもが、完全な形で残されていたのである（図版二、図四）。そのことに気が付いて、私は唯々、啞然とするばかりであった。このことは、一例に過ぎないが、実物を見なければ分からないことは、本当に数多い。現物を見る重要さを、改めて思い知らされた一事である。

件の漆棺が見出された、固原北魏墓の発見自体は、早く一九七三年夏、鉄道敷設に伴う地質調査のボーリングへと溯る。その後、一九八一年の水路拡張工事が、誤って本墓の上に及び、先のボーリング穴を通じて、大量の水が墓中に流れ込んだ。そのため、漆棺の木棺部は、腐朽により失われてしまい、剥がれ落ちた漆皮のみが百余片、断片的に残されることになった。現固原漆棺は、失われた木棺を新調して赤紫に彩色し、その上に漆皮を貼り付ける形で復元されたものである。このようにして復元された漆棺に関しては、一九八四年六月の「寧夏固原北魏墓清理簡報」〔『文物』84・6〕などで報告されたが、⁽³⁾何と云っても、北魏時代の彩色漆画の見事な美しさで世界を驚かせたのは、一九八八年に寧夏人民出版社から刊行された、『固原北魏墓漆棺画』⁽⁴⁾であろう。本書はB五判、厚さが五耗にも満たな

い、ソフトカバーの冊子ながら、当時としては異例とすべき、精細なカラー図版を惜しみなく用いた、非常に優れた書物で、復元された現代の木棺に貼り付ける以前の、発掘当時の漆棺図の面影を、なお今日に伝え続けるという点で、学術書としての価値を保ち続ける良書である。本漆棺の制作年代は、北魏の太和（四七七―九九）頃とされているが、後述するように、本書には、殆どの孝子伝図の原図が、カラーで収められ、私が舜の物語中の「金銭」文字を見出だしたのも、本書の図版においてであった。また、固原漆棺の図像をめぐっては、その復元時に見事な摸写図（漆棺画摸本）も製作され、本書の原図集には欠けている孝子伝図も、蔡順図（後述）を除く、カラーの摸写図中に、全て収録されている（但し、遺憾なことに、それらは、いずれも極めて小さいため、題記等を読み取ることが出来ない）。その摸写図の方は、固原博物館に展示されている（当時）。さて、本書にはもう一点、精巧な線描による摸写図（漆棺画線描図）が二枚、折込で付されていて、まずその内の本漆棺左右の側板の図を使い、本漆棺に描かれた孝子伝図の概観を示そう。図一は、本漆棺の両側板の線描図を掲げたもので（上が左側板、下が右側板）、本漆棺の孝子伝図は、両側板の第1層に描かれている。



図一 本漆棺の孝子伝図（上、左側板。下、右側板）

その孝子伝図は、黄色火炎紋による三角形の山型を区切りとし（孝子伝図のみ）、山型と山型の間にも描かれたものとも捉えられる。本漆棺の孝子伝図に用いられた、特色あるこの山型についてはその後、呉強華氏蔵（以下、呉氏蔵と称する）北魏石脚脚部の孝子伝図（郭巨図。後述）の区切りとして用いられていることが判明した（以下、郭巨石脚と呼ぶ）。図二は、本漆棺の山型（上）と呉氏蔵郭巨石脚の山型（下）の区切りを示したものである⁶。本漆棺のそれは、黄色の火炎紋、郭巨石脚のそれは、三つの岩山の周囲に銀杏の木という、意匠の違いが認められるものの、三角形の山型を孝子伝図の区切りに用いる点、両者は一類のものと思われる、共に北魏時代の孝子伝図の特徴と考えて良いだろう。だから、図一の上下（両側板）の三角形の山型の描かれている部分が、本漆棺の側板の第1層、即ち、孝子伝図の描かれている部分となるが、例えば図一下、右側板の第1層の右半を見ると、そこが全くの空白となっていることから知られるように、本漆棺の孝子伝図には失われてしまった図像も数多い。そこで今、図一において、現存する孝子伝図に対し、1-18のアラビア数字による通し番号を付けた（その数字は、図版の漢数字「一-十八」と一致させてある）。その1-18（図版1-18。内、1-11が左側板〈左幫〉に、12-18が右側板〈右幫〉に描かれる）の孝子伝図の内容を示せば、次の通りである（なお2*〈2の右半〉及び、18〈18



図二 山型の区切り
（上、本漆棺。下、郭巨石脚）

*は、図一上下の線描図また、『固原北魏墓漆棺画』に未収録（後述）。

左側板（左幫）

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1 (図版一) 舜(1) | 2 (図版二) 舜(2) |
| 3 (図版三) 舜(3) | 4 (図版四) 舜(4) |
| 5 (図版五) 舜(5) | 6 (図版六) 舜(6) |
| 7 (図版七) 舜(7) | 8 (図版八) 舜(8) |
| 9 (図版九) 郭巨(1) | 10 (図版十) 郭巨(2) |
| 11 (図版十一) 郭巨(3) | |

右側板（右幫）

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 12 (図版十二) 伯奇(1) | 13 (図版十三) 伯奇(2) |
| 14 (図版十四) 伯奇(3) | 15 (図版十五) 丁蘭(1) |
| 16 (図版十六) 丁蘭(2) | 17 (図版十七) 丁蘭(3) |
| 18 (図版十八) 蔡順 | |

本漆棺の孝子伝図は、「画面為横卷式」と言われる如く、⁽⁷⁾恰も画卷に見るような形式で描かれており、図一の通し番号の通り、左側板では右から左（1↓11）へ、右側板では左から右（12↓17、18）へ進むべく配されている。即ち、漆棺本体から見れば、両側の孝子伝図は、共に頭側から足側へ降る方向となる（18蔡順図は現在、左側板1舜（1）の右、18*に貼られているが、孝子伝図の基づいた孝子伝テキストから考えて、後漢の蔡順の図像が舜のそれに先立つとは一寸考え難いので、今仮に右側板の丁蘭図（15↓17）の右、18の位置に移してある）。例えば図一に見る、本漆棺

の孝子伝図を、孝子伝テキストの側（孝子名の上のゴチック体アラビア数字で陽明本、船橋本孝子伝の目録条数を表わす）から纏めると、

左側板

1 舜（1―8）、5 郭巨（9―11）

右側板

35 伯奇（12―14）、9 丁蘭（15―17）

11 蔡順（18）

の五孝子伝図として捉えることが出来る。以下、図版一―十八（図一、1―18）の五孝子伝図を概説するが、それに先だって、『固原北魏墓漆棺画』所収の孝子伝図の原図と摸写図の収録状況を一瞥し、図版一―十八との関係を一覽としておく。『固原北魏墓漆棺画』の「漆棺画摸本・原件」（内表紙、18頁分）は、本漆棺の摸写図と原図とを収録した部分だが（カラー）、頁や図版番号が無い。今仮に、その内表紙の裏を1頁、次頁の表を2頁、その裏を3頁、次々頁の表を4

固原漆棺の孝子伝図について(上)

	原図		摸写図		備考
舜(1)	9上		4下	5中	図版一
舜(2)		10下(左)	4下(左)	5中(左)	図版二
舜(3)	9下	10下	4下	5中	図版三
舜(4)		10下	4下	5中	図版四
舜(5)				5中	図版五
舜(6)		10上		5中	図版六
舜(7)	11下	13上		5中	図版七
舜(8)	11下(右)			5中	図版八
郭巨(1)				5中	図版九
郭巨(2)	11上	15上		5中	図版十
郭巨(3)	11上	15上		5中	図版十一
伯奇(1)		13下			図版十二
伯奇(2)			3下	5下	図版十三
伯奇(3)			3下	5下	図版十四
丁蘭(1)			3下	5下	図版十五
丁蘭(2)				5下	図版十六
丁蘭(3)				5下	図版十七
蔡順					図版十八

表一 『固原北魏墓漆棺画』原図収録状況

頁という風に数え（17頁まで）、一頁の図版の位置を上（中）下と捉えて、舜(1)―蔡順（図一、1―18）十八図の原図と摸写図の収録状況を、一覧としたものが表一である（例えば、9上は、9頁目の上を表わしている）。また、備考欄に、図版一―十八との関係を示したので、併せ参照されたい。さて、表一を見ると、『固原北魏墓漆棺画』に収められる、本漆棺の孝子伝図の原図は、舜(1)―伯奇(1)（1―12）までの十二図であつて、伯奇(2)―蔡順（13―18）の六図は、収録されていないことが知られよう。また、最後の蔡順（18（18*））に至つては、摸写図にさえ収録されておらず（舜(2)左半（2*）も同じ）、これまでそれらの図像は、報告されることがない。

二

本漆棺の左側板（左幫）の第1層、1―8に描かれる孝子伝図は、舜の物語を題材とした舜図、舜(1)―(8)（図版一―八）の八図である。舜図の基づいた孝子伝テキストの内、現存するものとしては、陽明本、船橋本孝子伝（以下、両孝子伝と称する）及び、三教指帰成安注所引の逸名孝子伝など、三つの文献を上げることが出来る（また、参考とすべきものに、敦煌本事森（かつて敦煌本孝子伝とも呼ばれた）、舜子変がある）。本漆棺の舜図を概説するに当たつて、まず三つの孝子伝本文を示せば、次の通りである。⁹⁾

陽明本

帝舜重花、至孝也。其父瞽瞍、頑愚不別聖賢。用後婦之言、而欲殺舜。便使上屋、於下燒之。乃飛下、供養如故。又使治井没井、又欲殺舜。々乃密知、便作傍穴。父畢以大石填之。舜乃泣東家井出。因投歷山、以躬耕種穀。天下大旱、民無収者、唯舜種者大豊。其父填井之後、兩目清盲。至市就舜糶米、舜乃以錢還置米中。如是非一。父疑是重花。借人看朽井、子无所見。後又糶米、对在舜前。論賈未畢、父曰、君是何人、而見給鄙。将非我子重花

耶。舜曰、是也。即來父前、相抱号泣。舜以衣拭父兩眼、即開明。所謂為孝之至。堯聞之、妻以二女、授之天子。故孝經曰、事父母孝、天地明察、感動乾靈也。

船橋本

舜字重花、至孝也、其父瞽瞍、愚頑不知凡聖。爰用後婦言、欲殺聖子。舜或上屋、叟取橋、舜直而落如鳥飛。或使掘深井出。舜知其心、先掘傍穴、通之隣家。父以大石填井。舜出傍穴、入遊歷山。時父填石之後、兩目精盲也。舜自耕為事。于時天下大旱。黎庶飢饉、舜稼獨茂。於是糴米之者如市。舜後母來買。然而不知舜。々不取其直、每度返也。父奇而所引後婦、來至舜所問曰、君降恩再三、未知有故旧耶。舜答云、是子舜也。時父伏地、流涕如雨。高声悔叫、且奇且恥。爰舜以袖拭父涕。而兩目即開明也。舜起拜賀。父執子手、千哀千謝。孝養如故、終無變心。天下聞之、莫不嗟嘆。聖德無匿、遂踐帝位也。

成安注所引

孝子伝云、虞舜字重花。父名瞽叟。々更娶後妻生象。々敖。舜有孝行。後母疾之、語叟曰、与我殺舜。叟用後妻之言、遣舜登倉。舜知其心、手持兩笠而登。叟等從下放火燒倉。舜開笠飛下。又使舜濤井。舜帶銀錢五百文、入井中穿泥、取錢上之。父母共拾之。舜於井底鑿匿孔、遂通東家井。便仰告父母云、井底錢已盡。願得出。爰父下土填井、以一盤石覆之。驅牛踐平之。舜從東井出。父坐填井、以兩眼失明。亦母頑愚、弟復失音。如此經十餘年。家弥貧窮無極。後母負薪、〔詣〕市易米。值舜糴米於市。舜見之、便以米与之、以錢納母俸米中而去。叟怪之曰、非我子舜乎。妻曰、百大井底、大石覆至、以土填之。豈有活乎。叟曰、卿將我至市中。妻牽叟手詣市、見糴米年少。叟曰、君是何賢人、數見饒益。舜曰、翁年老故、以相饒耳。父識其声曰、此正似吾子重花声。舜曰、是也。即前攬父頭、失声悲号。以手拭父眼、兩眼即開。母亦聰耳、弟復能言。市人見之、莫不悲嘆也。史記云、堯老、

令舜摂行天子之政。堯知子丹朱不肖不足授天下。於是權授舜。則天下得其利、而丹朱病。授丹朱則天下病、而丹朱得其利。卒授舜以天下。舜踐天子位。是為虞舜。廿以孝聞。年卅堯拳之。在位卅九年也

起伏に富んだ舜の物語を、陽明本により、次の五つの話柄に分けて検討しよう（船橋本は、ほを欠き、成安注所引は、ほ、ほを欠く）

い焚廩

ろ掩井

は歴山で耕すこと

に易米、開眼

ほ堯の二女を娶ること

へ帝位を譲られること

さて、本漆棺の舜図には、非常に貴重な題記（墨界で囲われ、金地に一ないし、三行に墨書）が残され、図像の内容が明示される。その舜(1)―(8)に記される題記を一覧として示せば、次の通りである（上に原文、下の「」内にそれを読み易くした形を示す）。

(1) 舜後母将火 〔舜後母将火烧屋、欲殺舜時〕

焼屋欲殺

舜時

(2) 使舜逃井灌德金錢 〔使舜逃井、灌德金錢。〕

一枚錢賜将石田時 一枚錢賜、将石田時

(3) 舜徳急走従〔舜徳急走、従東家井里出去。〕^(得)
東家井里出去^(裡)

(空行)

(4) 舜父朗萌去〔舜父朗萌去〕^(首)

(5) 舜後母負蒿平陽〔舜後母負蒿、平陽市上売〕

市上売

(6) (右) 舜来売蒿〔舜来売蒿〕

中 応直米一斗倍徳二十〔応直米一斗、倍徳二十〕^(値)

(7) (右) 舜母父欲徳見舜〔舜母父欲徳見舜〕^(得)

左 市上相見〔市上相見〕

(8) (右) 舜父共舜語〔舜父共舜語〕

左 父語即開時〔父語即開時〕

(空行)

舜(1)―(8)の八図の題記によって、上記い―へに対応する図像内容を考えると、

い 焚廩―舜(1)

ろ 掩井―舜(2)、(3)

は 易米、開眼―舜(4)(5)(6)(7)(8)

となるだろう。即ち、本漆棺の舜(1)―(8)の八図は、い焚廩、ろ掩井、に易米、開眼を内容とするもので、換言すれば、

固原漆棺の孝子伝図について(上)

は歴山で耕すこと、ほ堯の二女を娶ること、へ帝位を譲られること、三つの場面を欠くことが知られるのである。

ここで、本漆棺を含め、孝子伝図としての舜図を一瞥しよう。これまで管見に入った舜図には、以下の七遺品がある（「」は、榜題、題記）。

- (1) 和林格爾後漢壁画墓（西壁1層。「舜」）
- (2) ポストン美術館蔵北魏石室（左側下。「舜従東家井中出去時」）
- (3) ミネアポリス美術館蔵北魏石棺（左側。「母欲殺舜々即得活」）
- (4) ネルソン・アトキンズ美術館蔵北魏石棺（右側。「子舜」）
- (5) C.T.Loo 旧蔵北魏石床（PLATE 31, 右、中。「舜子入井時」、「舜子謝父母不在」^死）
- (6) 北魏司馬金童墓出土木板漆画屏風（一、二塊表1層。「虞帝舜」「帝舜二妃娥皇女英」「舜父瞽叟」、「与象敖填井」
「舜後母燒廩」）
- (7) 本漆棺

(1)は、当墓の孝子伝図の劈頭に位置する点、孝子伝図であることは疑いないが、瞽叟（左）と舜（右）との供養図のようで、一考を要する¹⁰。なお武梁祠（一石1層、十帝図の内。「帝舜名重華、耕於歴山、外養三年」）の舜図は、十帝図の第八であって、孝子伝図とは見られないものの、その題記は、孝子伝と深く関わり、特には歴山で耕すことの伝承の発生、展開を考える上で、注目すべき資料である¹¹。(2)は、後母と象が、舜の居る井戸に大石を落とし（左）、舜は、東家の井戸から脱出して歴山へ向かう（右）という、ろ掩井の二場面を描く¹²。その題記「舜従東家井中出去時」は、例えば成安注所引の、「舜従東「家」井出」と酷似している（陽明本「舜乃泣東家井出」）。(3)は、継母（右）と舜（左）が対坐する、供養図である¹³。(4)は、瞽叟と象（大石を右肩に担ぐ）とが井戸を埋め（左上）、舜がもう一つの井戸から

上がる（左下）、ろ掩井の二場面を左半とし、帝舜（左）と堯の二女（娥皇、女英。右）との三人を描く、ほ堯の二女を娶る、へ帝位を譲られることを右半とする、計三場面から成る舜図である。⁽¹⁴⁾ (5)は、囲屏右側板右中に、大石を井戸へ落とす瞽瞍（右）と後母（左）を描いた、ろ掩井の場面（右）と、舜（右）と対坐する瞽瞍、後母（左）を描いた、供養の場面（中）との、二場面から成る舜図である。⁽¹⁵⁾ (6)は左から、倉を焼く後母（即ち、い焚廩。部分）、井戸に大石を落とす象（左）と瞽瞍（右。即ち、ろ掩井）、さらに、娥皇女英（左）と帝舜（右。即ち、ほ堯の二女を娶る、へ帝位を譲られること）という、三場面から成る舜図⁽¹⁶⁾で、本漆棺における舜(1)共々、い焚廩の場面が残されることは、極めて珍しい。

舜図（1舜(1)―8舜(8)）

舜(1)

図三は、本漆棺の舜(1)を示したものである（図版一。題記「舜後母將火焼屋、欲殺舜時」）。図三（舜(1)）は上記、い焚廩の場面、画面右に後母、左上に裸形の舜（共に左向き）、中央に炎上する家屋が描かれる（屋内には無人の屏風が据えられている）。後母の図像で注目すべきは、彼女が胡服（鮮卑服、鮮卑帽）を纏うことで（以下の人物も同じ）、

固原漆棺の孝子伝図について(上)



図三 舜(1)

北魏孝文帝は太和十七（四九三）年、洛陽へ遷都して漢化政策を推し進め、胡服胡語（鮮卑語）の使用を禁じたから、そのことは、本漆棺の制作がそれ以前に溯る、明徴の一と捉えられる。画面左上、屋根の左から、手足を広げて飛び出す舜の様子については、陽明本には特段の言及はないが（「乃飛下、供養如故」）、例えば船橋本では、「叟取橋、舜直而落如鳥飛」、成安注所引では、「舜知其心、手持兩笠而登。叟等從下放火燒倉。舜開笠飛下」（史記五帝本紀、敦煌本事森、舜子變も同じ）などとあつて、現行陽明本には見えない、焚廩の厄に臨んだ舜の方策に関する、何らかの一節がかつて存したことは、ほぼ確かである。加えて、その舜が裸形に描かれていることは、極めて異様で、本漆棺の舜図の扱った孝子伝が、現行文献には未見の、そのような一節を持っていたことを、強く示唆しているが、このことは、続く舜(2)、(3)の場面でさらに考えてみたい。

舜(2)、(3)

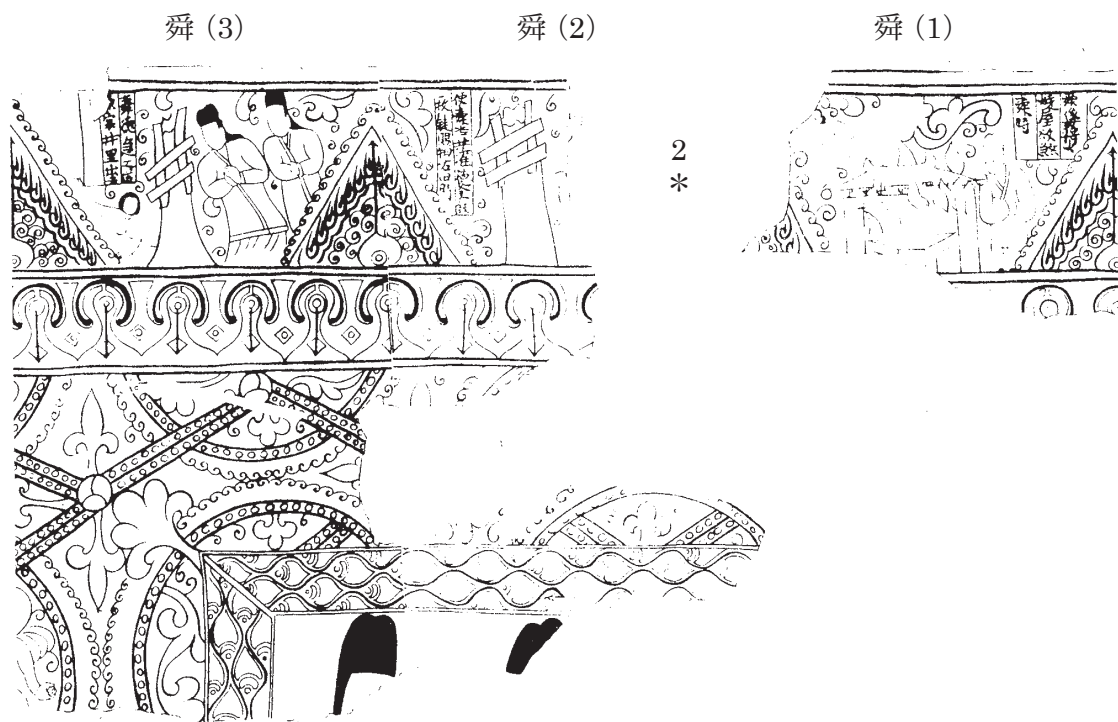
図四、五は、本漆棺の舜(2)、(3)を示したものである（図版二、三。題記「使舜逃井、灌徳金銭。一枚錢賜、將石田時」。「舜徳急走、從東家井里出去」）。図四が先に触れた、実見時に私を驚愕させた凶像である。それは実見時以前には、想像すら付かない凶像であった。図六は前述、『固原北魏墓漆棺画』所収の漆棺左側板における、舜(2)の部分を拡大したものである（その全図は、図一上に掲げた）。その舜(2)を見ると、2*とした、凶像の右半の欠落していることが分かる。即ち、一九八八年の『固原北魏墓漆棺画』刊行当時には、その右半（2*）の存在は確認されておらず、その原図の凶版（表一、10下左）も摸写図のそれ（表一、4下、5中）も、図六の舜(2)と同様、舜(2)の左半（図四〈図版二〉の左半）のみを収載するに過ぎなかった。さて、一九八八年本書公刊の後、幻の舜(2)の右半が再発見、現漆棺に貼り加えられた事情については、一九九〇年の張莉氏による「北魏墓漆棺画的保護与修復」論文40頁左に、



図四 舜(2)



図五 舜(3)



図六 舜 (2) 線描図

漆棺画の画面を修復する中、私たちは中央美术学院美術史学部と連携して、繋ぎ合わせ、摸写し損なった幾つかの漆画を全部探し出し、繋ぎ合わせ、修復することに成功した。それは一九八八年七月に寧夏人民出版社から出版された『固原北魏墓漆棺画』の中の画面や図の不足を補うもので、この出土した断片による全面的な修復保全が行なわれたのである。その具体的な内容は(1)『固原北魏墓漆棺画』の摸写図にある棺蓋部の上半部長方形の空白の部分は、胡先生の細心の御指摘の下、漆画の残片を探し出し、繋ぎ合わせることに成功したことによって、画面が一つ完璧なものとなった。(2)左側の板の画面に右の画面の断片と左の漆画とが一つの画面として繋がり合っていなかったが、今度、両者をよく繋ぎ合わせることに出来る一つの漆画が発見された。具体的な図柄は、一人の人物と傍に串で繋がっているように見える銭という画面であって、さらにもう一つの空白が埋められたのである。(3)棺蓋の左下半部の漆画は破損が酷かったが、種々の困難を越え、破片を全部見付け出し、繋ぎ合わせることに成功した。修復した画面に一つ鳥獣図が

あつて、その原画面の全体から見れば、鳥獸の方向は左向きであり、ところが、摸写図の鳥獸図の方向は逆になっているので、摸写図に間違いのあることが分かる

とある、(2)に明らかである⁽¹⁸⁾（孫彬氏訳による）。画面右の人物（左向き）は、後母であろう。その左の井戸の上部に描かれているのは、おそらく轆轤^{ろくろ}で、後母の両手は、それを回して井戸の泥を引き上げる所作と思しく、その泥中に金銭が混じっていて、画面右、二列十個の金の穴空き銭が描出されていることは、誠に驚くべきことと言わなければならぬ。

図四に登場する金銭については、両孝子伝にその記載がなく、例えば太平記三十二「虞舜孝行事」に、「堅牢地神モ孝行之志ヲ哀トヤ思召ケン、井ヨリ上ケケル土ノ中ニ、半金ヲ交リケル」（西源院本）という記述など、その出所に關する謎が、長らく問題とされて来た。しかし、図四の出現により早く北魏以前、ろ掩井譚に金銭を描く、孝子伝図の存在していたことが明らかとなるに及び、その研究状況というものが一変する⁽¹⁹⁾。即ち、例えば陽明本のろ、

又使治井没井、又欲殺舜。々乃密知、便作傍穴

は、普通唱導集下末孝父篇所引の、

又使濤井、殺舜。々已密知、帶銀錢五百文、作傍穴

などとする形が原型で、現行陽明本は、その傍線部を脱落させたものと見るべく、さらに上掲、成安注所引の、

又使舜濤井。舜帶銀錢五百文、入井中穿泥、取錢上之。父母共拾之。舜於井底鑿匿孔

の如く、元来それを備える孝子伝逸文も見出された（舜子変にも「上界帝釈、密降銀錢伍百文、入於井中」、事森にも、「又感天降銀錢致於井中」などと見える）。このことは、孝子伝のろ掩井に、古く金銭の話の備わっていたことを、考えさせずにおかないものがあつて、思えば、全国的に流布する昔話の、継子の井戸掘りに、

継母が井戸がえをするから井戸に入れという。隣の爺が変に思つて継子に百文やり、井戸の中に銭がたくさんあるとつて釣瓶の中に一文ずつ入れて引き上げさせるといふ。継母が銭に氣をとられていたすきに隣の爺が横穴を掘つて逃がす。継母は銭が出なくなつたので、大石を井戸に落として子が死んだと空泣き⁽²⁰⁾

などとあることも（岩手県遠野市。日本昔話大成5）、そのことを傍証するものだろう。一方、成安注所引のそれは目下、舜子変の典拠として最も可能性の高い孝子伝である。そして、凶四など、例えば成安注所引の孝子伝に基付いて描かれたものと考えられる。

凶五は、題記の如く、凶四から続くろ掩井の結末を描いた場面で、「東家井」から脱出する舜（場面左下）を描く。その題記の、「舜……従東家井里出去^(理)」は前述、(2)ポストン美術館蔵北魏石室の舜凶の題記、「舜従東家井中出去時」とよく一致し、それらは、例えば成安注所引の、「舜従東「家」井出」などから出たものだろう。凶五は、右から瞽瞍、後母、井戸、舜が描かれている。その井戸は、瞽瞍と後母から見れば、瞽瞍の家（西家）の井戸だが、舜から見ると、東家（隣家）の井戸である（(2)などでは、二つの井戸が描かれる）このことから、凶五の井戸は、二つの井戸を含蓄するものと捉えられる（後述、郭巨(3)、凶十五参照）。問題なのは、凶三左上の舜と同様、本凶左下の舜がやはり、裸形とされていることである。さて、ろ掩井に際し、舜が裸となることは、例えば舜子変に（末尾（一）内に、入矢義高氏による訳を添えた）、

舜聞濤井、心裏知之、便脱衣裳、井辺跪拜、入井濤泥（井戸浚えと聞いて、舜はそれと思ひ当たつたもの、すぐに服脱ぎ、井戸端に跪いて拝をなし、井戸に入つて泥浚え）

と見え、さらに東家の老母が、

老母便与衣裳、串着身上、与食一盤喫了（老母は舜に着物を与え、身に着せてやりますと、ご飯を食べさせます）

ともあって、舜の裸であったことが確かである。このことは目下、舜子変にしか見当たらないが、舜子変の右の記述は大変、重要で、それは、い焚廩に際した舜共々、ろ掩井に際する舜の、裸となる一節が、かつて孝子伝に存していたことを、強力に示唆する事実の外ならず、本図や図三の舜の描法が、そのような孝子伝に基付いたものであることを思わせるのである。舜子変に見える、舜の脱衣の相当古いものらしいことは、なお列女伝の逸文にも、その痕跡が残されている。ろ掩井の金銭が現行の孝子伝から消失したのと同様、現行列女伝の本文においても、消失した一節の存したことは、清朝考証学の列女伝本文の研究にあって、早くから気付かれていた事実である。⁽²²⁾ 例えば清、蕭道管撰、列女伝集注一は、例えばい焚廩、ろ掩井のその現行本文

・ 瞽叟与象謀殺舜、使塗廩。舜歸告二女曰、父母使我塗廩。我其行。二女曰、往哉。〔*A〕舜既治廩、乃捐階、瞽叟焚廩、舜往飛出（伝顧愷之筆摸刊本）。

・ 象復与父母謀、使舜浚井。舜乃告二女。二女曰、兪。往哉。〔*B〕舜往浚井。格其出入、從掩。舜潛出
に対し、史記本文の他、列女伝の逸文として史記索引所引、宋、曾慥撰類説所引、宋、洪興祖撰楚辭補注所引等のそれを上げ、特にい、ろにおける*A、Bをめぐり、現行本の脱落を指摘している。今、その内の楚辭補注三天問に引く、列女伝逸文を示せば、次の通りである。

列女伝云、瞽叟与象謀殺舜、使塗廩。舜告二女。二女曰、時唯其戕汝、^{*A}時唯其焚汝。鵠如汝裳衣、鳥工往。舜既治廩。戕旋階、瞽叟焚廩。舜往飛。復使浚井。舜告二女。二女曰、時亦唯其戕汝、^{*B}時其掩汝。汝去裳衣、童工往。舜往浚井。格其出入、從掩。舜潛出（四部叢刊本）

楚辭補注所引を見ると、例えばろ掩井における現行本*Bの箇所には、

時亦唯其戕汝、時其掩汝。汝去裳衣、童工往（^{これまたただそれ}時亦唯其汝を戕^{そこな}わんとし、^{おほ}時其汝を掩^{おほ}わんとす。汝裳衣を去り、

竜工して往け)

の脱落のあることが知られる（い焚廩における* Aも同じ）。その「汝去裳衣（去汝裳衣（史記正義所引通史）、竜工往」は、「あなたは⁽⁶⁾着物を脱ぎ、水竜の術を使って進みなさい」という意味であって、ここに舜が裸になったことが見え、これが前述、舜子変や凶五左下の淵源の一つであることは、殆ど疑いがない。鳥工、竜工のことは、梁武帝撰通史（史記正義所引）や、梁元帝撰金樓子二にも見えるから、* A、Bの逸文は、六朝以前のものであることが確かである。余談となるが、山東省の済南市は、有力な舜伝説の発祥地として知られ、舜井や歴山（千仏山）⁽²³⁾が残される。その済南市は、七十二泉と称される、豊かな湧泉に恵まれ、市内の地下は、縦横に水脈が走っている。ろ掩井の、舜の浚う井戸と彼が逃れた東家の井戸という、設定の背景をなしていたのが、その済南市の地勢に外ならず、舜が敢えてトンネル（傍穴（両孝子伝））を掘らずとも、二つの井戸は、水脈により繋がっていたのである。列女伝逸文の、「竜工往」は、例えばその類説の注に、「竜知水泉脈理也」と言うように、二女が舜に、その水脈を利用して逃げるよう教えたもので、済南市の舜井に巨大な鎖が備わり、竜を繋ぐためのものと伝承されるのも、おそらくその名残であろう。さて、そのような地勢的背景を失って、二女も登場しない、孝子伝のろ掩井では、話の辻褄を合わせるべく、舜が傍穴（両孝子伝）を掘らねばならず、その時間稼ぎのため、金銭のことが考案されたものと思われる。舜が裸になるという前述、舜子変や凶五左下の背後には、このような舜の物語の形成史があったらしい。同じことは、い焚廩、* Aの脱落部分についても指摘できる。その「鵲如汝裳衣、鳥工往」は、「あなたの衣を鵲^{かざり}の羽のようにして、鳥の術を使って飛行なさい」という意味のようで（類説の注に、「習鳥飛之巧以往、鵲錯也」とある。錯は、交互に羽撃くこと）、衣を羽とした名残が、凶三左上の、裸形の舜の、大きく広げた両腕の動作として、表現されているのではないかと。ところが、何時しかこのことが失われると、「舜直而落如鳥飛」（船橋本）の如く譬喩化したり、「両笠」（史記、成安

注所引) 即ち、二つの落下傘(パラシュート)が登場させられたものと思われる。

三

舜(4)

図七は、本漆棺の舜(4)を示したものである(図版四。題記「舜父朗萌去」)。本漆棺の舜図には、は歴山で耕すことの図像がなく(成安注所引も同じ)、本図以降の舜(4)―(8)の五図は全て、に易米、開眼をめぐる図像となる。図七は、屋内に一人、拱手して坐す瞽瞍(左向き)を描く。上から幔幕が垂れ、瞽瞍を囲むのは、三方からの屏風である。例えば成安注に、「父坐墳井、以両眼失明」とある部分を場面化したもので、「聖賢」(陽明本)なる舜の迫害に及んだ父に、天罰が下ったのである。成安注ではさらに、「亦母頑愚、弟復失音」と続くが(事森も同じ)、シンデレラ型の仕返しなら、瞽となる筈の(後述、纂図附音本注千字文では現に、「母便耳聾」となっている)継母が頑愚とされているのは、それでは意思の疎通が全く不可能となることを、回避するためであろう(聾には愚かの意味もある)。しかし、継母と弟のことは、図像化されていない。題記中の萌は、瞽(瞽は、盲に通じる)の俗字

固原漆棺の孝子伝図について(上)



図七 舜(4)

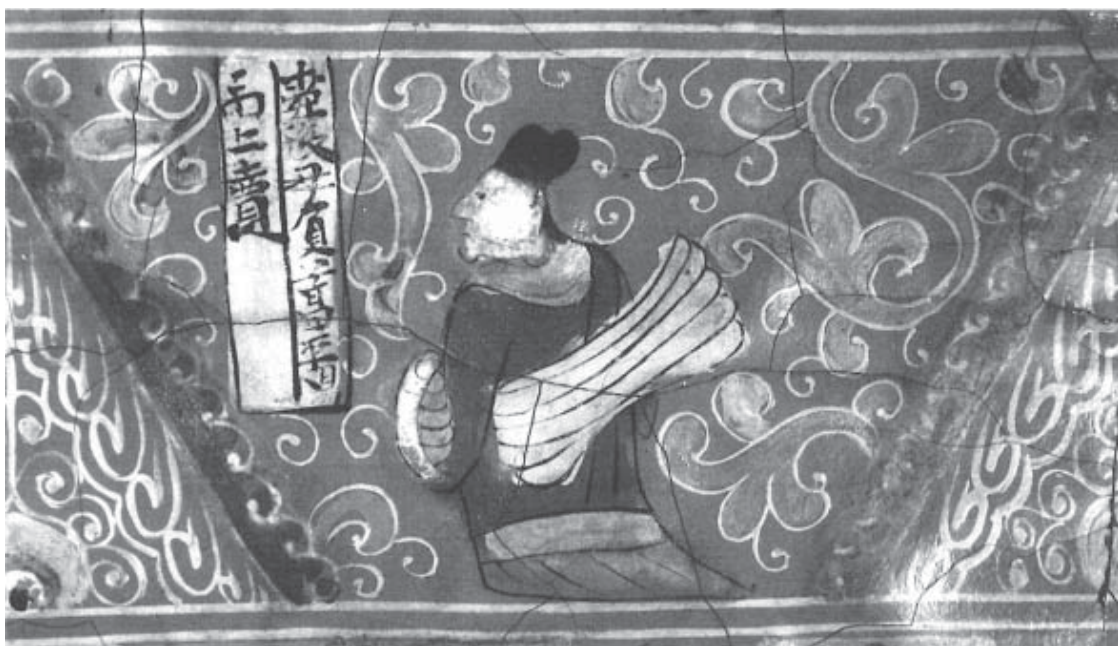
萌を転じて萌としたもので、朗萌は、「清盲」（陽明本）に同じく、俗に言う明盲あきめくらのことである（開いた眼には何ら外見上の異常がないにも関わらず、視力のない状態）。本図の瞽瞍の眼がぱっちり開いているのは、そのことを表現したものである。

舜(5)、(6)

図八、九は、本漆棺の舜(5)、(6)を示したものである（図版五、六。題記「舜後母負蒿、平陽市上売」。「舜来、売蒿」(右)、「応直米一斗、倍徳二十」(中)。舜(5)、(6)及び、次の舜(7)の三場面が、に易米、開眼における、易米の話に当たる。図八は、藁束わらたばを左腕に抱え、市場へ赴く後母（左向き）を描いたもので、成安注所引に、「後母負薪、「詣」市易米」と記す部分を場面化したものである（舜子変、事森も同じ。但し、両孝子伝不見）。題記の蒿は、藁わらだが、他に所見がない（成安注所引等、薪たきぎとする）。また、「平陽市上売」の平陽は、山西省臨汾県で、堯の都があつた。舜がその平陽で米を売っていたことは、（真源賦（駢志十四「淘井安金」所引）に

舜糶於平陽中、父認之。乃拭其目、目以光明

と見えるが（天中記二十四、尚史二、釋史十等にも）、真源賦のことは、よく分からない。²⁴平陽は、成安注所引その他に見えない地名で、山西省にも歴山、舜井の有力な一伝がある通り（史記正義所引括地志）、舜の物語の地域的な伝承過程を示す、貴重な説であろう。図九は、画面右に立つのが後母（左向き）、左に立つのが舜（右向き）で、左端の人物（右向き。上半身のみ）は、物語には関係のない市人と見たい。舜が左手で差し出すのは、米の入った袋で、中の米の上には、藁代も添えられている筈である。米袋の下に台が描かれているのは、その時、舜が市場に店（米屋）を出していることを示すのであろう。図九に該当する、成安注所引の孝子伝を示せば、次の通りである。



図八 舜(5)



図九 舜(6)

(後母負薪、「詣」市易米。) 値舜糶米於市。舜見之、便以米与之、以錢納母貸米中而去

貸は、袋、囊に同じく、ふくろのことだが、米袋のことは、両孝子伝には見えない(舜子変「米囊、後述、纂図附音本注千字文「米袋」)。図九、中央の題記「応直米一斗、倍徳二十」は、極めて難解で、その二十を二十升(即ち二斗)と考え、例えば「応に米一斗に値するに、倍して二十(升。二斗分)を得しむべし」の如く訓読して、舜は、後母の糶を二倍の値段で買い取って、その錢で倍の量の米を与えた(加えて錢の方も密かに米袋中に返して置いた)という風に解しておく(周代の一斗は、一・九四リットルである)。舜が後母の薪を倍の値段で買い取ったことは、例えば三注の一、纂図附音本注千字文23、24「推位遜国、有虞陶唐」注に、

(舜) 見其母売薪飢寒、常倍与薪価糶米、錢秘安於米袋中

と見えている(後の後母の言にも、「常倍与我薪価」とある)。

舜(7)、(8)

図十、十一は、本漆棺の舜(7)、(8)を示したものである(題記「舜母父欲徳見舜」(右)、「市上相見」(左)。「舜父共舜語」(右)、「父語即開時」(左)。八図ある舜図の、最後の二場面である。まず図十(舜(7))に対応する、成安注所引の本文を示せば、次の通りである。

叟怪之曰、非我子舜乎……叟曰、卿将我至市中。妻牽叟手詣市、見糶米年少

図十は、画面右に瞽瞍、左に後母(共に左向き)が左方へ歩む所を描き、目の見えない瞽瞍が後母に引かれ、市へと出向く場面となっており、右の題記が対応する。左の「市上相見」は、一見、次の図十に掛かる如くだが、纂図附音本注千字文に、後母に対する瞽瞍の言として、「来日将吾入市。与其人相見」と、左の題記に酷似した表現の見えるこ



図十 舜(7)



図十一 舜(8)

とから考えて、図九左に描かれた、市へと向かう瞽瞍のかねての疑問——「非我子舜乎」（成安注所引。「非吾舜子乎」（纂図附音本注千字文）——を、「市場で互いに会って見て（確認しよう）」という、瞽瞍の気持を題記化したものと思われる。

図十一（舜⑧）に対応する、成安注所引の本文を示せば、次の通りである。

叟曰、君是何賢人、数見饒益。舜曰、翁年老故、以相饒耳。父識其声曰、此正似吾子重花声。舜曰、是也。即前攬父頭、失声悲号。以手拭父眼、両目即開

図十一は、に易米、開眼における、瞽瞍の開眼を描いたもので、右から瞽瞍、後母（共に左向き）と舜（右向き）が立って対話している場面で、右の題記「舜父共舜語」は、その対話が後母を挟んで、瞽瞍と舜の間でなされたことを示している。瞽瞍の帽子が女帽となっているのは、左の後母のそれと取り違えたものらしい。左の題記「父語即開時」は、舜と語り終えた瞽瞍の、視力が戻ったことを言う。図十一を見ると、左の舜は、両手を父に差し出しており（瞽瞍と後母は、拱手している）、その動作は、「以手拭父眼」（成安注所引。事森も同じ）を反映したものであろう。舜の動作に関しては、衣、袖で拭った（両孝子伝。衣襟（纂図附音本注千字文）とするもの）他、父の涙（目）を舐めた（舜子変、劉向孝子伝、真源賦）と記すものもある。

（続く）

注

- (1) 張莉氏「北魏墓漆棺画的保護与修復」(『寧夏文物』4、一九九〇年12月)
- (2) 拙稿「重華外伝―注好選と孝子伝―」(拙著『孝子伝の研究』(『佛教大学鷹陵文化叢書』5、思文閣出版、平成13(二〇〇一)年) III 二所収。初出平成10(一九九八)年) 参照。
- (3) 固原県文物工作站「寧夏固原北魏墓清理簡報」(『文物』84・6)。なおそれに先だって、韓礼榮、羅豊氏「固原北魏墓漆棺的發現」(『美術研究』84・2、一九八四年5月)、王瀧氏「固原漆棺彩画」(同)も公刊されている。なお張莉氏注①前掲論文参照。
- (4) 寧夏固原博物館『固原北魏墓漆棺画』(寧夏人民出版社、一九八八年)
- (5) 図一上下は、注(4)前掲書所収、折込の漆棺左側板(上)、漆棺右側板(下)に拠る。
- (6) 図二下は、呉氏提供の拓本写真に拠る。その呉氏蔵郭巨石脚の拓本、原石写真は、趙超、呉強華氏『永縁的北朝深圳博物館北朝石刻芸術展』(文物出版社、二〇一六年) 図版13石床構件に収められる。なお当石脚については、拙稿「郭巨図攷―呉強華氏蔵北魏石床脚部の孝子伝図について―」(『佛教大学文学部論集』98、平成26(二〇一四)年3月) 参照。
- (7) 注(4)前掲書二棺板漆画(三)棺側板漆画1孝子故事絵画、11頁
- (8) 注(2)前掲拙稿参照。
- (9) 両孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』(汲古書院、平成15(二〇〇三)年)による。
- (10) (1)の舜図については、拙著『孝子伝図の研究』(汲古書院、平成19(二〇〇七)年) 口絵2頁図1、また、そのI二2参照。
- (11) 拙稿「武梁祠帝舜図攷―歴山、外養をめぐって―」(『京都語文』22、平成27(二〇一五)年11月) 参照。
- (12) (2)の舜図については、注(10)前掲拙著I二4(399頁)、図八下参照。
- (13) (3)の舜図については、注(10)前掲拙著口絵14頁図11、また、そのI二4参照。
- (14) (4)の舜図については、注(10)前掲拙著II二1「重華贅語」(初出平成16(二〇〇四)年) 722頁図四参照。なおその718―719頁など、舜図を十四と認定したが、その後、十四の中の(2)―(7)の六図(また、II二4 770頁、780、781頁において伯奇図と認定した

- (4) 100 〈図六一十二〉の七図) は、韓朋図であることが判明したので、謹んで訂正する。その間の経緯に関しては、拙稿「韓朋溯源(二)―呉氏蔵韓朋画像石について―」(『佛教大学文学部論集』105、令和3(二〇二二)年3月)を参照されたい。
- (15) (5)の舜図については、注(10) 前掲拙著Ⅱ二1 722頁図五参照。なお右側板中に記される供養図中の「舜子謝父母不在」^(死)題記に關しては、注(11) 前掲拙稿147頁以下を参照されたい。
- (16) (6)の舜図については、注(10) 前掲拙著Ⅱ二1 723頁図七参照。
- (17) 図六は、注(4) 前掲書所収、折込の漆棺左側板に抛る。
- (18) 張莉氏注(1) 前掲論文40頁左(孫彬氏訳)
- (19) 注(2) 前掲拙稿参照。
- (20) 昔話と孝子伝の関係については、注(10) 前掲拙著序章「孝子伝への招待―昔話と孝子伝―」を参照されたい。
- (21) (一)内は、入矢義高氏訳「舜子変」(中国古典文学大系60『仏教文学集』(平凡社、昭和50(一九七五)年)「変文」所収) 131頁による。
- (22) その経緯は、山崎純一氏『列女伝』上(新編漢文選 思想・歴史シリーズ、明治書院、平成8(一九九六)年) 91頁校異4、92頁校異5に詳しい。
- (23) 注(10) 前掲拙著Ⅱ二1参照。
- (24) その「淘井安金」には、真源賦の引用に先立って、
御覽、舜為父母淘井、取金銀安罐中、与父母。
類林、舜耕歷山。歲不熟。舜糶。其母詣糶、每還錢与米。問之、子也。因相抱歸。拭其父目、尋自明。堯聞而妻之
とあることも、一考を要する。前者は、太平御覽八一二に、
又〔史記〕曰、舜為父母淘井、將銀錢安罐中、与父母
と見えている。

(25) 参考までに、纂函附音本注千字文23、24「推位遜国、有虞陶唐」注を示せば、次の通りである(古活字本により、写本を参照した)。

堯号陶唐氏。讓位与舜、舜号有虞氏、讓位与禹。堯治天下五十二載。遭洪水九載。自知無德。生子丹朱、不肖不堪治国。聞舜有孝行、召之妻以二女。大女名娥皇、小女名女英。舜姓姚、字重華。少喪母、父名瞽叟。更娶後母生象。後母常行惡心、言害舜。瞽叟信後母讒言、共象弟等、謀欲殺舜。乃令蓋屋。舜知其意、遂持大席上屋。父放火烧屋。舜以席裹身跳下。叟見不死、復使陶井、欲埋之。時隣家知其意、語舜曰、父母当令君陶井必有惡心。何不避之。舜曰、我只可順父母而死為孝。不可逆父母而走為不孝。親友閔之、与舜錢五百、使為方便。預作計、向東家井中、穿穴相透。明日果令陶井。舜腰著錢五百、入井中。父母挽鐘上看、舜乃見銀錢一文。歡喜未有填意。井深闇黑、視不見底。舜乃於東家井傍、穿成孔。相通訖、報父母曰、錢尽也。父母及弟、見鐘中無錢。遂將石填之。其父兩目即盲、母便耳聾、弟遂口噤。後貧困、又遭天火、燒其屋。舜已從東家井中出、投諸歷山耕田、歲收二百石粟。改名易姓、入市糶米。見其母壳薪飢寒、常倍与薪餽。糶米錢私安於米袋中、更与餅肉、令担負而歸。到家開袋、米中得錢者數度、皆如此。瞽叟怪問之。妻曰、市中有一少年。見貧困每為怜恤、常倍与我薪餽。叟曰、此非吾舜子乎。妻曰、舜今在百尺井底、以石填之。自非聖人、豈能更生。來日將吾入市。与其人相見。妻遂扶叟至市、見昨日少年來。叟曰、為吾喚至。報謝其恩。妻便喚得少年至。叟問曰、君是何人。相怜過厚。孝弊不善、兩目失明。貧苦飢寒、無以相報。少年曰、我是忠孝之人。見翁貧困、時相愍念。何必言報。叟聞其声響曰、非吾舜子乎。音声相似。舜曰、是也。於是父子相抱悲哭、哀声盈於道路。市人見之、莫不悽慘。舜將衣襟拭父目、即開朗明。母亦能听声、象即便能語。舜再拜曰、為子不孝、違於曠野。自今已後、更不如此。父亦大悔言、今後不敢举意向吾聖子。市朝人民、見舜孝行、莫不流涕。因是孝順声、聞四海。帝聞其聰明、禪位与之。是為帝舜。舜垂拱無為、万邦歸化。在位八十二載。生子商均不肖。又禪位、与司空伯禹。是為夏後氏。三王之祖也。

なお本書の本文は、未刊だが、小川環樹、木田章義氏『注解千字文』(岩波書店、昭和59(一九八四)年。文庫版(青220)1、平成9(一九九七)年)に、画期的な口語訳が収められる。

(佛敎大学名誉教授)